

これから始める司法書士試験

0. 自己紹介

1. 司法書士試験を受験することが最善の選択か

2. 司法書士試験の概要

まずは合格できるか否か、その対策は何かを論ずる前に、試験の概要について触れる。試験の内容を知らずしてその対策はないからである。

①出願者数と合格者数（平成 24 年度）

出願者数 29376 名
受験者数 24048 名
合格者数 838 名

平均年齢 34.80 歳
最低年齢 21 歳
最高年齢 65 歳

合格率は、例年 2.8%前後。

②平均受験回数・出身学部

(A)合格者の平均受験回数：3～4 回

(B)合格者の出身学部の別

法学部：約 50%
その他：約 50%

③日時・場所

日時：毎年 7 月の第 1 日曜日（年 1 回。1 日で試験終了。合格科目持ち越し等の恩典なし）

場所：早稲田大学（東京。近年、日本大学・東洋大学・明治大学においても行われている）

④試験の内容

司法書士試験は、午前の部と午後の部に分かれる。それぞれの試験科目は以下の通りである。

午前の部	実体法科目	憲法、民法、刑法、商法（会社法）
午後の部	手続法科目	民事訴訟法、民事執行法、民事保全法 不動産登記法、商業登記法、供託法 司法書士法

試験科目は全 11 科目。

⑤試験の方法

以下午前の部と午後の部に分けて説明する。

【午前の部】

5 肢択一式の問題（マークシート）が計 35 問。1 問 3 点の計 105 点満点。

以下その内訳を掲げる。

憲法 3 問 民法 20 問 刑法 3 問 商法 9 問 計 35 問

【午後の部】

5 肢択一式の問題（マークシート）が計 35 問。1 問 3 点の計 105 点満点。
記述式の問題が 2 問。計 70 点満点。以下その内訳を掲げる。

（5 肢択一式）

民事訴訟法 5 問 民事執行法 1 問 民事保全法 1 問
不動産登記法 16 問 商業登記法 8 問 供託法 3 問
司法書士法 1 問

計 35 問

（記述式）

不動産登記法 1 問 商業登記法 1 問 計 2 問

午前の部と午後の部をあわせて計 280 点満点である。

⑥試験の時間割

午前の部 午前 9：30～午前 11：30 2 時間
午後の部 午後 1：00～午後 4：00 3 時間（記述式含む）

午後の部は、マークシート 35 問・記述 2 問(1 問を解答するにつき約 1 時間はかかる)を解かなければならないため、迅速性が求められる。

⑦基準点

「午前の部の択一式」「午後の部の択一式」「午後の部」の記述式にそれぞれ基準点が設けられており、各成績のいずれかがそれぞれ設けられた基準点に達しない場合は、それだけで不合格とされる（総合成績で合格点をとっていても不合格となる）。

【平成 24 年度の合格基準点】

午前の部の択一式	84／105 点	28 問分
午後の部の択一式	78／105 点	26 問分
午後の部の記述式	38／70 点	約 5 割 4 分

つまり、平成 24 年度は、最低でも上記の点数をそれぞれとらなければ合格することはできない。基準点は年度毎に異なる。

⑧合格点

平成 24 年度の合格点は、215／280 点である。

⑦で示した合格基準点をすべて足しても、84 点＋78 点＋38 点＝200 点であり、上記の点数に達することはできず、15 点不足することになる。この 15 点を択一式で補う場合、1 問 3 点なので、基準点よりも 5 問分多くとらなくてはならないことになる。例えば、以下のように点数をとれば合格することができる。

午前の部の択一式	93／105 点	31 問分	＋3 問
午後の部の択一式	84／105 点	28 問分	＋2 問
午後の部の記述式	38／70 点	約 5 割 4 分	＋なし
(記述式は採点基準が不明)			

93 点＋84 点＋38 点＝215 点 (合格)

215 点 (合格点)

上記のことから、ほとんど満点に近い点数をとらないと合格することはできないため、正確な知識力と理解が要求される。また、捨て科目というものが存在しないことが特徴として挙げられる。出題数の少ない憲法や刑法等も抜かりない準備が必要である。

⑨試験委員

- ・法務省の内部委員
- ・現役の司法書士で構成される外部委員

(A)過去の司法書士試験の分析による結果、法務省の試験委員の方が、問題を作成する際に使用している書籍(基本書・体系書・注釈書)がある程度判明している。

(B)現役の司法書士が実際に実務で手掛けた事件をもとに試験問題(特に記述式の問題)が作成されることが多い。

例)平成 20 年 わかしお銀行と三井住友銀行の合併
平成 22 年 ライブドアの会社分割

したがって、司法書士の実務上の問題点を意識しておくことが合格への近道となる。

⑩試験に関するよくある質問

- (A) 受験資格はあるか。
- (B) 法学部は有利か。
- (C) 行政書士・宅建の有資格者は有利か。
- (D) ロースクール生・旧司法試験受験経験者は有利か。
- (E) 初学者からの一発合格者はどれくらいいるか。
- (G) 買わなければならない書籍は何か。

⑪一般的な司法書士試験の難易度と実態

一般論では司法書士試験は難関試験の 1 つに数えられる。他の資格と比べると、税理士試験や弁理士試験に匹敵すると言われ、大学受験と比べると、旧帝国大学や早慶より難しいと言われる。しかし、その難関さの理由が他の試験とは異なる。例えば、東大理Ⅲや旧司法試験、公認会計士試験等では、高度な論理的思考力や国語力が要求される。しかし、司法書士試験においては、そうした能力が要求される場面は少なく、むしろ問題の質自体は平易である。

ではなぜ司法書士試験は超難関試験と言われるのか。それは、ほぼ満点の解答力が求められ、かつ、それを迅速にこなさないといけない関係上、記憶しなければならない量、演習しなければならない量が他の試験に比べて膨大だからである。誤解を恐れず言えば、司法書士試験は日本最大の暗記大会なのである。

3. 司法書士試験に 1 発合格は可能か。合格をする条件は何か。

・司法書士試験の特徴

①問題の質自体は比較的平易(但し、最低限の国語力は要求される)

②問われる論点が予想可能

(A)過去の司法書士試験で問われた論点(過去問)からの出題率 約 6 割
→法律科目からの出題であるので試験のネタとなる論点には限りがある
過去に出題した問題との重複が避けられない(H11 法務省見解)

(B)組み合わせ問題の出題率 約 8 割 H25 35 問中 30 問
組み合わせ問題は 5 肢中 3 肢(6 割)の正誤判断ができればほぼ正解可能
→過去問+派生知識のみで 7~8 割解答可能 35 問中 26 問前後

しかし、合格するためには 35 問中 30 問の解答が必要
→+約 4 問分以上の知識の上乗せが必要
しかし、+4 問分以上の出題論点も十分予想可能

(C)過去問分析(過去問の分析し、試験委員の出題の傾向を掴むことにより、次の本試験の出題論点(未来問)を予想すること)
→受験生にとって最重要課題。

(D)ネタ本分析(試験委員が問題作成の際に使用する書籍を分析することにより、次の本試験の出題論点を予想すること。試験委員が使用する書籍については過去問分析によって判別する)
→受験生にはそこまでの余裕なし。予備校の仕事。

(E)司法書士実務分析(司法書士の実務上での問題点を分析することにより、次の本試験の出題論点を予想すること。過去問分析によって実務で問題となっている事件等が試験に問われやすいことは既に判明している。また、司法書士試験は実務家登用試験である)
→受験生が実務のことを調べることは困難。予備校の仕事。

以上のことより、出題される論点自体は相当程度絞り込みをかけることができる。
したがって、適切な方法をもって勉強すれば、確実に 1 発合格可能である。

・司法書士試験の難所

- ①量が膨大(理解・暗記しなければならない論点が資格試験随一。死ぬ気でやらないととても覚えきれない量)
- ②1 年～20 か月分の勉強量は最低限必要(モチベーションの維持が困難)
- ③試験時間の不足(ただ覚えるだけでは足りず、一瞬で頭の引き出しから知識を取り出す能力が要求される)

人一倍の努力を惜しまずすることができ、やるべきことを誠実にこなす人間だけが合格を勝ち取ることができる。

4. 司法書士試験の対策(方法論)

①1 回の講義における最低学習時間

講義	3 時間
テキスト音読	2～3 時間
過去問	1～3 時間
情報一元化	2 時間
情報一元化ツール音読	2 時間
計	10 時間～13 時間

週 2 回で 20 時間～26 時間

年間で 960 時間～1248 時間

②1 日の最低勉強時間

忙しい方でも平日において最低 1 日 4 時間は確保するべきである。可能であれば 6 時間以上とることが望ましい。

$$4 \text{ 時間} \times 5 \text{ 日} = 20 \text{ 時間}$$

土日・休日は少なくとも 6 時間以上は勉強する必要がある。

$$6 \text{ 時間} \times 2 \text{ 日} = 12 \text{ 時間}$$

週の最低勉強時間 32 時間

5. 司法書士試験の対策（精神論）

①絶対に一発で合格するという気持ちを持つこと

②受験のプロになること

6. 皆様へのご提案